



便所：床は白色タイルだが、幅木に黒色タイルを用いた斬新な意匠。他の部分は角柱だが便所廻りには面皮柱を用い、数寄屋風の意匠とする。当初から水洗便所で、設置の経費が当時 800 円だったという。



建具：廊下側への採光を考えたためか、廊下境の建具を障子とし、障子は中央部分にガラスを嵌め込み、子障子で開閉できるようにになっている。

中廊下：建物を東西に貫く細長い廊下。当初は巾3尺（約90cm）だった。中廊下の暗さを解消するために、南側の居室境に明障子を付けるなど工夫が見られる。



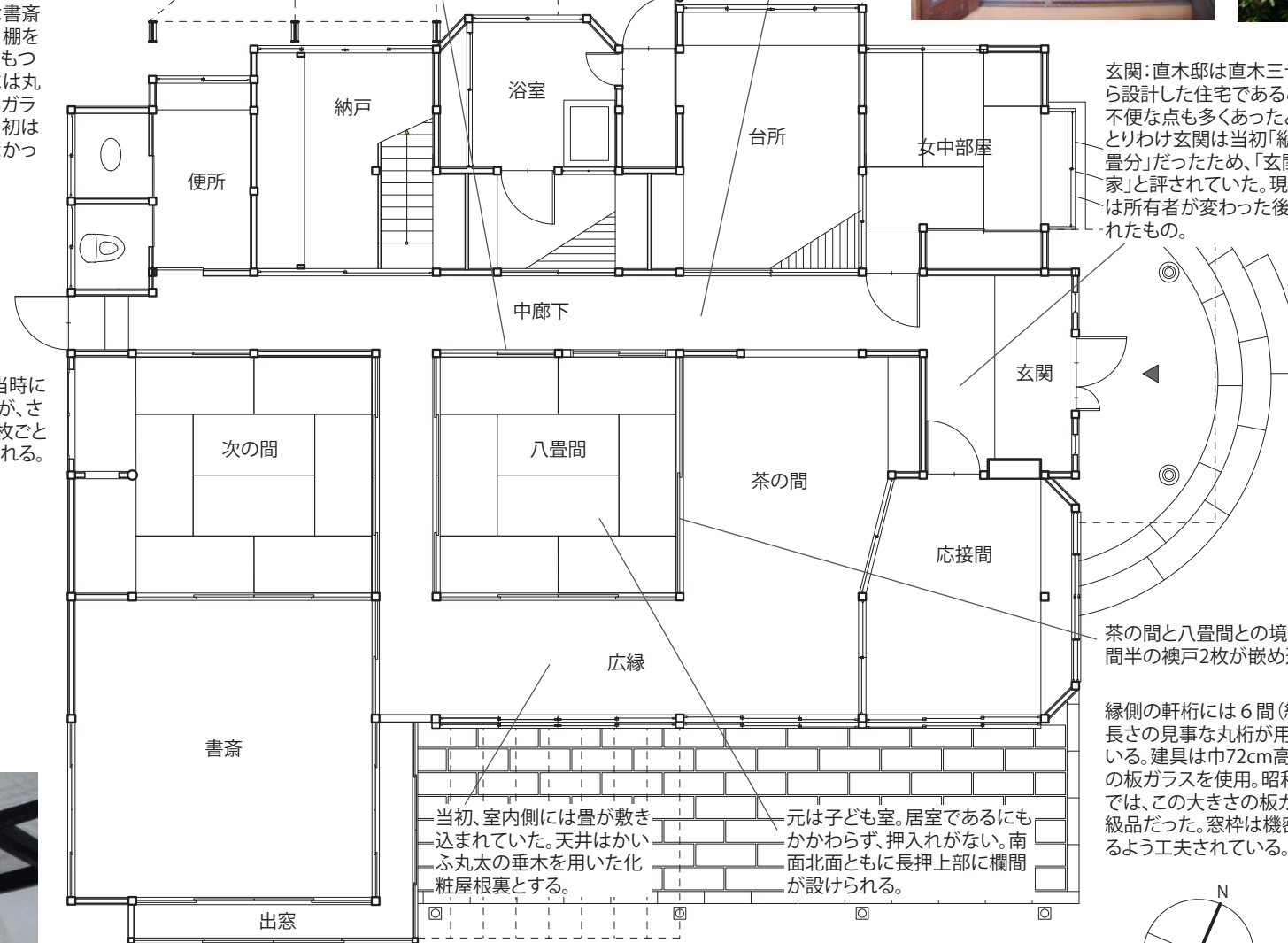
次の間：位置的には書斎の次の間だが、床・棚をもつ本格的な構成をもつ座敷。棚正面の壁には丸窓が設けられ、外部ガラス窓は開閉可能。当初は丸窓以外に採光はなかった。



襖：芭蕉布を用いた当時においても高級な襖だが、さらに梅、笹、菊など一枚ごとに四季の草花が描かれる。



書斎：真壁に長押を打ち、和室の構成だが、床はコルク貼りの和洋折衷としている。天井角部は漆喰塗りの蟻壁を円弧状に折上げ、格天井とする。長押・蟻壁長押・天井の格縁は黒漆塗り。極めて凝った意匠を持ち、この住宅の見どころのひとつといえる。



出窓：東と南の2方に大きく取られる。内側と外側の2重に建具が設けられ、機密性と開放性を併せ持つ。東側では現在でも海を見通すことができ、創建時には眼下に海を見下ろす絶景だったと考えられる。



旧直木三十五邸 の見どころ

監修：関東学院大学水沼研究室 製作：関東学院大学黒田研究室
協力：よこはま洋館付き住宅を考える会



小屋裏から発見された棟札により、上棟は昭和7（1932）年9月1日だったことがわかる。創建から約80年間生き続けた建物である。

